

平家物語をベースにした能の中でも、公達を主人公にした修羅能には、敦盛・兼平・清経・実盛・忠度・経正・知章・朝長・頼政と人名のものが多くあります。何事もうろ覚えの私は、恥ずかしながら名前と曲の内容を結び合わせるのに一苦勞(勉強不足か、単に記憶力が悪いせい!)。でも「通盛」は今回初めて観た能ですが、他の修羅物と一味違って親しみやすく、これは一回で覚えられそうです。

通盛は平清盛の弟・教盛の長男で、平家栄華により越前三位まで昇進し、源平・一ノ谷合戦では大將軍の一人として従軍しました。通盛には小宰相(こざいしょう)という名の妻がいて、「平家物語」では決戦を前に沖合の平氏の船団から妻を呼び寄せ、最後の名残を惜しむほどの愛妻家ぶり。剛勇で知られる弟・教経から不謹慎と咎められたとか。一方、無理もない話で、その時小宰相は身重だったそうです。

能はまず、一ノ谷の合戦で亡くなった平家一門を弔うために阿波の鳴門に来たワキ僧(森常好)が登場。次に舞台には篝火をつけた小舟が出されます。その船にツレ海士=小宰相の幽霊(鶴沢久)とシテ漁翁=通盛の幽霊(観世鍔之丞)の順に乗り込みます。シテは尉面で漁翁らしいのに、ツレはやや地味ながら唐織で夫婦にしては調和しないけれど、二人が老いの身を謡う連吟はしみじみとして、なぜか私は『俺は河原の枯れすすき、同じお前も枯れすすき…』と言う歌を思い出したほど。篝火の明りをたよりにワキ僧が読経を続けると、小宰相は昔の事を話し始めます。夫・通盛が討死したことを知り、まず乳母を呼んで「誰を頼みてなごろうべき、この海に沈まんとて…」と言うと、乳母が引留めるのを振り払い入水します。この時の所作が興味深く、乳母の代わりにシテが引留め、ツレはポンと舟から降りて沈む動作、続いてシテも同じように舟から降りて沈みます。謡の内容を聞けば分かることだから良いのですが、能の所作・装束は、時々、理屈に合っていないものですね。でも、とても印象に残る美しいシーンでした。今回はシテ・ツレ共に中入りしましたが、ツレだけが舞台に残ることもあるようです。

中入りに行われるアイ狂言と言うのは、演者が装束を替える時間 7~8 分を目途に演じられ、私などここで目を休めたりして余り聞いていないのですが、今回のアイ(山本則秀)の話は面白かった。

内容は二人の馴初めについてですが、通盛が 16 歳の小宰相を一目見て気に入り、何度かラブレターを出すのに、何の返事も来ず落胆。その苦しい胸の内を恋歌に書いて、ある日彼女の乗っている車に放り込むと、彼女はそれを袂に入れ、その後、彼女の仕える女院の前で落としてしまいます。それを読んだ女院が返事を書くように言うと、顔を赤らめて(女心って、昔も今も変わらないな~)その言葉に従い返歌をして、この恋は成就したというのです。

後場では、通盛の面は今若(多分。中将より私にはハンサムに見える)、装束は平家の公達の戦闘姿であてやかに。小宰相はすべて白装束、大口(袴)まで白い。面は小面かと思うほど愛くるしく二人とも前場から大変身しての登場。まず、戦陣についた通盛が明日は戦さと言う日に小宰相の元に帰り、私が死んだ後は弔いをしてくれと頼み、睦ましい一夜を共にしたこと。しかし弟に諫められて後ろ髪引かれる思いで戦場に戻り、合戦に臨んだこと。修羅物とは思えない程、人情味あふれた夫婦愛に焦点があてられ謡い、演じられます。そこが、やはり新鮮で異色の感がある能でした。最後は修羅物お決まりの戦いの様子をシテが舞って能は終わりましたが。

あの時代でも、一般に夫の死後、妻は弔いをしながら余生を送る習わしのところを、小宰相は後追い自殺をしてしまう。そのいじらしさや、ひたむきさに憐れみを覚え、この逸話が有名になったようです。

この能を観た翌日、NHK テレビの日曜美術館でピカソが取り上げられていたので見ていたら、ピカソのモデルであり、深い関係にあった女性(8人?)の内、2人がピカソの死後、後追うように自殺したということを知り驚きました。今の時代でも、このような濃厚な関係であるのですね。

私は能を通して、自分の想像以上の世界をかい間見るのも、興味のあることの一つです。(尾崎記)
<付記> 笛・八反田智子 小鼓・大倉源次郎 大鼓・國川純 太鼓・観世元伯 地頭・梅若玄祥